

手話を用いた言語指導

研究第9部 中 一 郎

土 井 尚 典

(御殿場コロニー)

1. はじめに

① 重度精神薄弱児と生活を共にしている御殿場コロニーでは、いかにしたら、彼等と意志疎通が、できるかと考えて来た。「こころのふれあい」と一言にとっても児童が肉体的に健康であれば、言葉がなくても「こころのふれあい」が、出来るかもしれない。しかし、もし彼らが、お腹をこわして下痢をしたり、頭が痛くて嘔吐感があったりしたらどうやって保母は知ることが出来るであろうか。長い経験と知識によっても時には、困難なことがある。しかし、もし彼らに保母が尋ねて、彼らが答えることが出来たらと、考えてみた。又、彼らが自分の要求を、保母に訴えることが出来れば、どんなに彼らに楽しい毎日になるかもしれない。

過去、いくつかの方法で、言語指導を試みてみたが、発声機能上の問題や単語一語を覚えるのに6カ月ないし1年かかってしまうという問題があった。

そこで、何らかの方法で相手に言葉を伝える方法はないかと考え、聾啞者の使う手話をもっと簡単にし、身体全体で使う、手話を考えてみた。この手話と、言葉発声を使えば、相手に意志が伝わるのではないかと、考えてみた。

② 発声の機能

人間が発声をするということは、何を意味しているのだろうか、と考えてみた。私たちの結論は、「こころに感じたことを表現したい、出来れば、誰かに伝えたい。そして、共通のイメージに出合いたい」ということではないかと、考えた。もし、そうであるならば、相手に何かを伝える時には、発声が伴うものではないかと考えてみた。

2. 本研究の目的

手話技法を用いて、児童に言語指導をすれば、手話の習得と共に発声行動が多くなるのではないかと考えてみた。

の基に研究した。

3. 方 法

1. 基本になる二語文を五文用意し、それに基づいて、手話技法を用いて児童と話をすることにした。

各々の基本文を三つの動作に分け、手話文とした。(第1図)。

第1図 基本文

	漢	に	行く
1	手の形  手のひらを下に向け水平にして波の形を3つ作る		人さし指で目の所をさし、ひじを中心に水平に90°動かす
2	バス  両手でハンドルを左右に動かすかっこうをする		乗る 左手のひらを立て指先を外に回した形で右人さし指をぐるぐるまわす
3	山  手のひらを下に向けて腕のあたりで山を作る		のぼる 両手で登り坂を歩く形をする
4	お茶  左手で湯のみの形をつくり右手で茶たの形をつくる		のむ 右手で「を」つくりのむ動作をする
5	テレビ  両手で、テレビのチャンネルをまわす動作をする	同上	見る 目の高さで、指先を相手に向けてつき出す

2. 言語指導の方法

言語指導の方法は、A・B反転方式を用いた。Aは、指導期間。Bは消却期間。日程は第1表の通りである。測定日は7月5日、9日、16日、20日、26日にした。

第1表

7月5日	7月9日	7月16日	7月20日	7月26日
コントロール期間 C	指導期間 A1	消却期間 B	指導期間 A2	

3. 測定方法

5つの文章をTの後について言わせる方法をとった。採点基準は、発声と手話に分けて採点した。

- (イ) うみ、バス、やま、おちゃ、テレビと
正しく発声した場合 +3
- (ロ) う・う、バ・ア、や・ん、お・ん、テ・ン・ンと
二音ないし3音に発声した場合 21
- (ハ) 何らかの発声をした場合 +1
- (ニ) 手話については正しい動作の時 +3
(近い動作の点+2。何らかの動作をした場合+1)

4. 対象児童(3名)

D夫: 17歳, 男, IQ25 (田中ビネー)
在所期間4年, 単純精薄
言語能力は, パパ, ママがいえる程度。
聴く能力はかなりあり, 日常会話では人の言うことは大体わかる。
運動能力は非常におちる。

E生: 13歳, 男, IQ35+α
在所期間6年, 未熟児
言語能力はかなりあるが, 器質性構音障害があり, 非常にききとりにくい。
右手, 右足にチック。
運動能力はかなりある。

F子: 17歳, 女, IQ25
在所期間6年, 脳性マヒ
聴く能力は優れている。
先生, パパ, ママ, ネーチャンを言える。
動作を用いて話しかける。
言葉をきき返えずと嫌がり逃げる。

4. 結果

1. コントロール期間(7月5日~7月9日) 図(第2図—以下同じ)の記号はC。コントロール期間の測定日は7月5日と7月9日の2回。海水浴に行く話をTが児童3名にする。レポートがついた時点で, Tの後について5つの文章(第1図)を云わせる。

D夫: Tの後について云うことが嫌でたまらない様子を

みせ, 3文目で察に帰ると云い出す。2回目の測定の際は会場に来ることを嫌がる。

E生: Tの後について云うが, その後はニコリともせずだまっている。2回目の時は終始ニコニコしている。

F子: Tの後について云わせられると判ったらすぐにTに背を向けて, ウーウーと生返事をする。2回目の測定の際は測定途中で嘔吐する。

3名のコントロール期間中の変化はみられなかった。

2. 第1回目指導期間(7月9日~7月16日)。図の記号はA1。この期間の測定日は7月16日。

D夫: 手話技法を用いて言語指導をはじめると, 会場が嫌な場所でなくなって来た。Tの指導には素直に従い急速に言語発声のみられる。海, バス, お茶, 手話が仲々出来ない。行く, お茶などの手話は逆にやってしまう。

E生: 行くのイの発音が抜ける。テレビを見るのヲの発音が抜ける。手話はすぐに覚えてしまう。

F子: 手話技法を用いて言語指導をしだすと急に元気が出て来る。嘔吐も, 指導はじめてからはTの後について手話を用いながら発声させればない。指導のはじまる時間になるとTを呼びに来るようになる。山にのぼる, お茶をのむ, テレビをみる, は手話の方が多く発声は仲々出て来ない。

3. 消去期間(7月17日~20日) 図の記号はB, この期間の測定日は20日。図の通り全員が, 消去されている。F子の「バスにのる」のみ上昇している。

4. 第2回目指導期間(7月20日~7月26日)。図の記号はA2。この期間の測定日は26日。

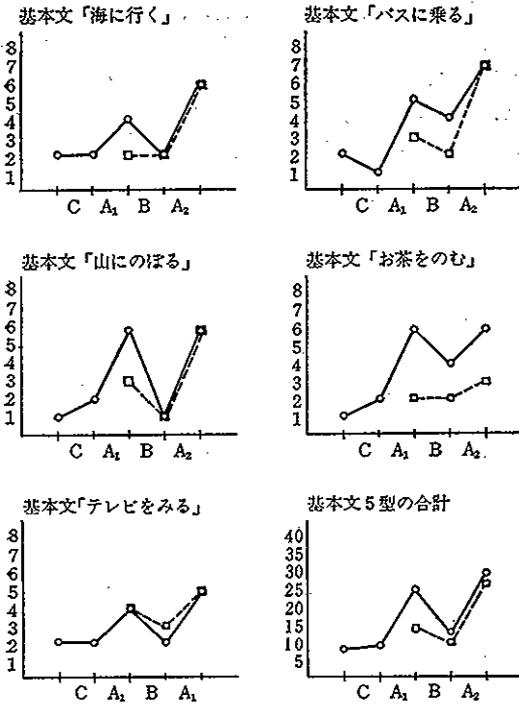
D夫: 正しい発音は出来ないが発声をして表現する限界まで, 発声するようになっている。

E生: もともとかなり正しい発音に近い発声をするので, 手話との関係をすぐ結びつけることは困難である。

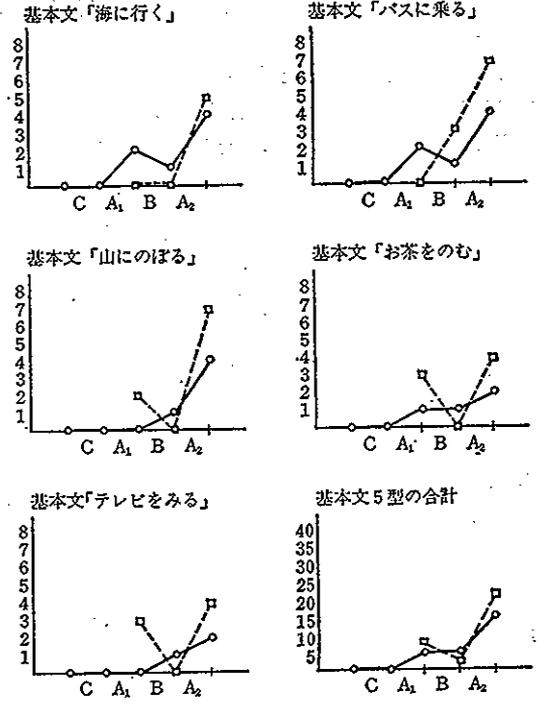
F子: 発声を使って喋ることが非常にきらいな児童であるが, 手話を覚えることにより発声が出て来ている。特に彼女の場合手話の覚え方, 急速であった。それに伴い

第2図 各期間(C, A1, B, A2)の得点表

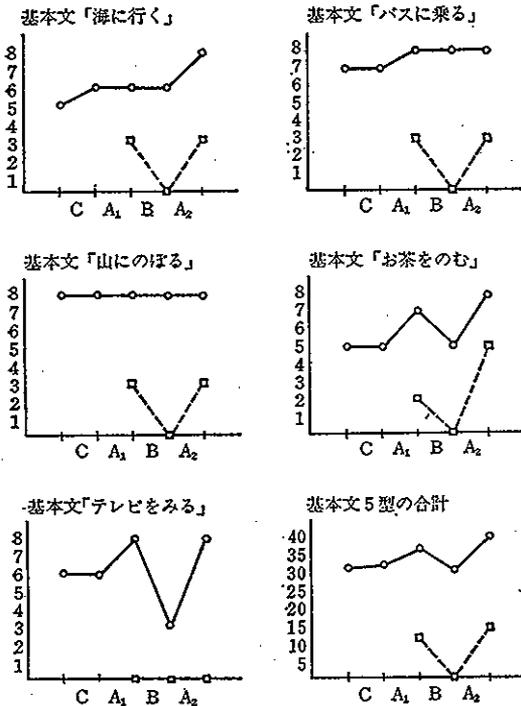
D夫
 ○—○ 言語得点 (以下同じ)
 □—□ 発声得点



F子



E生



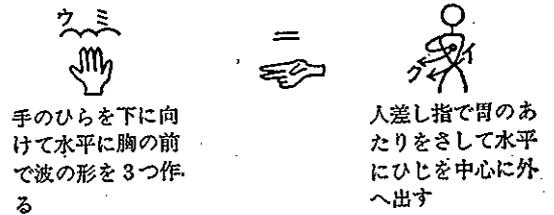
指導場面での表情も明るくなり、手話につられて発声が出てくる様子が指導中見られた。

5. 研究

1. 手話と言語の関係で、手話にアクセントをつける方が効果的であった。例えば「海に行く」の場合、「ウー」で波を2つつくり「ミ」で、1つの波をつくる。「ニ」は胸の前で水平に出してとめるときに「ニ」と発音する。「行く」は「イ」で胃の上をさし、「イー」とのぼしながら「ク」でとめる(第3図)。

2. 指先に意識が集中すると発声が出なくなるので、指導中は発声に伴わないときは同じ文章をくり返す必要があった。

第3図



3. 指導中話はずんでどんどん話題が音化していくので、Tは手話と言葉で児童の云ったことをくり返すと児童の意志がよく通じ非常に話はずんで行く傾向がみられた。

4. また、彼らが出した話は手話の方もすぐ覚える傾向がみられた。例えば「海に行く」では、「海で遊ぶ」「海でボートにのる」「魚つりをしたい」「スイカ割り

をする」など。

5. 指導中にF子が「夢」の表現が出来なくて手話を使って「夢をみたの？」と聞いた時、「ウン」といって、非常に大きな喜びを表現した。彼女が「夢」をみることをはじめて知った。

6. 手話には思考する機能はなく知覚的機能があるのではないかと指導中感じられた。